

グリーンプロシューマリズム in 水俣： 反農（薬）連（素描）

齋藤 實 男

ABSTRACT

How does a small-sized organic movement group do Green-prosumerism Marketing? To answer this question this interim-report shows HAN-NOREN (the Minamata Anti-pesticide Association of Minamata Mercury Disease Patients) Movement historically. This organic movement group=producers has the typical activity against the manufacturing company=Minamata Chisso Corporation and Japanese government, and for the prosumerists (=the consumers who support their activities and take part in the agricultural process directly or indirectly).

How have Minamata Mercury Disease Patients of HAN-NOREN been and worked since Minamata Bay was polluted and dead? What messages in the oranges have they conveyed to the consumers? How should we read them?

HAN-NOREN is constituted of about 20 patients. This association has developed through Minamata Disease Tribunals and appeal for not only Minamata city citizens but also the consumers in other towns who buy their organic produces since its establishing in June 1977. Let's

read their messages with our imagination and heart. “To know is to love.”

序

「チッソと同じ加害者になってはならない。」こうして無（一部減）農薬に切り替えていった水俣反農（薬）連（反農薬水俣袋地区生産者連合）。その生産者像と消費者像，それを結ぶ流通，交流はどのようなか？産直の今後は？この中間ノートは，グリーンプロシューマリズム⁽¹⁾を視点に，そのことを未完成ながら，少しでも浮き彫りにしようとするものである。

反農連（事務局：〒867-0034 水俣市袋茂道，ph.0966-63-5408, fax3522）は，水俣病事件被害者によって反公害・命の海の願いを込めて，無農薬甘夏栽培・産直の生産者の運動グループとして1979年6月に結成されたものである。それは水俣病事件裁判，その支援の血と汗の地道な活動の歴史を持っている。このノートは，そのほんの一部と想いの一端を，事務局長の大沢忠夫氏の述懐，機関誌『かづら』，生産者会員の杉本栄子さん，浜元二徳さんなどの語りによって紹介するものである。

キーワード：もやいなおし・水俣病・A=B=C（Administration=Business=Consumer）・生産と消費の懸隔・生産地（農漁村工業団地）と消費地（都市）の懸隔・隠蔽と暴露

第1章 反農（薬）連

反農連（生産者グループ主導型有機農業運動，1979年6月結成）のどの

ような点が、グリーンプロシューマリズムマーケティングと言えるのか？
その身を粉にした反公害・反農薬・反農協・反化肥・反差別・水俣病事件
告発・患者の経済的自立・超分業・産「消」提携・自主販売・グリーン PR
隊キャラバン・環境教育などの実践内容をプロシューマリズム体制と事務
局長大沢忠夫・つた子さんカップルと一男一女の4人家族を中心にドキュ
メンタリータッチ（歴史的に）で問うてみたい。

1 理念と創設

(1) 理念（生産と消費）

「毒を食わされた者は、毒を食わすことを拒否する」（『かづら』1985年）
理念：「反農薬（毒）・反農協（権力）・自主販売」「有機農業」「都市生活
者と（の）ネットワークづくり（＝援農・交流のための合宿所を含む）」「生
産者—消費者との新たな結合・連帯」「身（水）土不二」。

次の規約にその運動理念・組織論が盛り込まれている。

*反農（薬）連「規約 1979年6月10日」

2, 目的…水俣病事件を教訓として、自然、健康を破壊された生産者が、
農薬を拒否して、納得のいく農業を目指す。

生産者同士、協同互助精神に基づき、生活、生産の場を創り守って
いく。

3, 活動…

- ① 健康を害する農薬を拒否し、有機肥料を主体とした農業を行い、
安全で味の良い農産物、保存食を消費者に供給する。
- ② …勉強会、講演会、研修会を行う。
- ③ 他の生産者団体、消費者団体との交流、及び相互協力をはかる。
- ④ 機関誌の発行…

4, 事務局…

- ① …「かづら」の発行
- ② 管理困難な生産者に対する労働力の援助。
- ③ 日常の会務を遂行…

5, 構成(会員)：本会の趣旨に賛同し、規約、決定を順守する生産者賛同者によって 本会を構成…

6, 運営

- ① …総会（6月第1土曜日）を最高決議機関とし…年に1回行う。
総会は運営委員の決定により開催…必要に応じて臨時総会…
- ② …会長1名、副会長2名、世話人(各部落ごと若干名)、会計1名、事務局(若干名)をおき、運営委員会を構成し、会の運営をはかる。

7, 入会・脱会 …運営委員会の確認(が)必要…

8, 財政 会費 …財政は、会費、売上費、寄付金によ(る)…

- ① 会費は、入会者ひとり年千円…
- ② 生産物売上額の5(6)% (が) 事務局、会運営費…
- ③ 決算…年1回5月末…運営委員会(が) 監査…」(『かづら』第3・4合併号、1979年6月10日)

かくして、1979年6月3日、総会(袋地区20名[現在30名]の生産者参加)が、「チッソ・農協支配の重圧に抗しつつ」開かれ、「反農連体制創りの第1歩」となった。

役員 会長：杉本栄(現在杉本雄、栄さんは雄さんの父)、副会長：杉村栄治(現在森山良一、田上フミノ、奈須仙一)、会計：江口憲章(現在監査：杉本秀夫)、世話人：各部落毎若干名。

[会の性格]

“農業は毒”の認識を生産者の共通の痛みとして、水俣病的状況を告発

していく。本来の人間らしい生活、生産の場を創る為、複合的自給農業を可能な限り目指す。そして、生産者—消費者との新たな結合・連帯を深める。

弱い、切り捨てられる生産者同士の絆を深め、協同互助精神を高め、農協や現在の流通機構に拠らない自らの生産、加工、販売を考えていく。

[活動方針]

農薬、化学肥料を拒否し、有機農業を目指す、共同の堆肥作り（一時実践、現在でも奈須さんは実行。高齢化にともない鹿児島 of 業者にラクトボカシ肥外注）を進める。又その為、将来的に堆肥工場を自らの力で建設していく。

生産者同士の結束をはかり、消費者に安全で美味しい農産物を供給していく為、勉強会、研修会、講演会などを開き、研鑽に励む。特に購入者グループとの恒常的な交流・連帯を深める。

[事務局]

生産者、消費者とのパイプとして、又窓口として責任もてる体制を作っていく。とりわけ「かづら」通信の発行（季刊、現在76号）を定着させる。又耕作地の維持困難な生産者に対して労働の支援をしていく。（『かづら』第3・4合併号、1979年6月10日）

(2) 創設

A. 開墾

茂道（約130世帯、500人弱）発病以前は、茂道地区各戸の生計は7割以上が漁業依存。1967年～農業構造改善事業で国有林払い下げ、改善事業として甘夏ミカン栽培、これが漁業収入代替に。

1969年6月、杉本栄子さん（後に水俣病認定患者となる）、亡父の進さん

を含め112名で起こした対チッソ産業公害裁判に1973年勝訴(第1次訴訟)。海は、「財布」でなくなっていた。「出稼ぎ、県外流出も増えた」(大沢)。補償金1,600万円(A1,800万円障害者年金16万8千円/月, B1,700万円同年金8万5千円/月, C1,600万円同年金6万5千円/月)を元手に、慣れない甘夏の栽培開始。

大沢さんの述懐を聞こう。

「反農連に参加した生産者の耕地面積の殆どが0.5ヘクタール以下の第2種兼業。病苦、高齢、小規模経営と、農協からも落ちこぼれ生産者が多かった。」

「水俣病闘争支援を契機に73年5月に水俣に移住…私(大沢忠夫)は(チッソ工場前の)座り込みテントに参加する中で…援農, 援漁で患者さんの生活, 仕事を知るようになった…援農の中で「水俣病(事件)患者さんがミカン山で農薬を使い病状が悪化している」「告発しているチッソの化学肥料の使用」現実とのギャップに矛盾を感じることも多かった。とりわけ陸に上がったカッパの漁師…農協のいいなりで多肥料, 多農薬, 機械化の近代化農業を強いられる。」(大沢忠夫「水俣での試み」『農業と経済』)

上の「0.5ヘクタール(5反)以下の第2種兼業」について, 5反以上は, 1982年段階で, 反農連生産者会員42名(=42世帯, 合計92.5反, 平均2.2反)の内, 6世帯しかなく, 茂道地区19世帯(7, 3.5, 2, 0.5, 3, 3, 10.3, 2, 1, 0.5, 2, 2, 0.5, 0.3, 0.5, 0.4, 0.4, 5, 0.2反)中では3世帯, 北袋地区3世帯(2, 2, 1反)中ゼロ, 南袋地区7世帯(5, 1, 2, 3, 0.5, 0.3, 0.2反)中1世帯, 湯堂地区5世帯(2, 0.1, 0.1, 0.1, 0.1, 0.1反)中ゼロ, 袋神ノ川地区1世帯(2反)中ゼロ, 対岸の天草郡御所の浦大浦地区4世帯(1, 1, 1, 1反)中ゼロ, 出水市前田地区3

世帯(12, 10, 1反)中2世帯しかない。零細ゆえに有機農業へと転換でき、高齢化ゆえにご子女が独立されており、「納得」のゆく、金銭的に焦らない有機農業ができたのかもしれない。

高齢化については、反農連生産者会員42名（合計2475歳、平均年齢58.9歳）の内、50歳以下は10人しかおられず、逆に60歳以上は20人であった。50歳以下は、茂道地区19人（72, 67, 54, 61, 46, 45, 43, 50, 52, 54, 48, 75, 67, 66, 60, 62, 59, 56, 65歳）中では5人、北袋地区3人（30, 70, 63歳）中1人、南袋地区7人（52, 33, 70, 43, 73, 81, 81歳）中2人、湯堂地区5人（53, 53, 56, 51, 75歳）中ゼロ、袋神ノ川地区1世帯（51歳）中ゼロ、対岸の天草郡御所の浦大浦地区4人（72, 76, 68, 62歳）中ゼロ、出水市前田地区3人（45, 42, 68歳）中2人しかおられない。

B. 反農薬への転換

流通1（慣行栽培）：1974年、甘夏100ケース（20世帯分）産直、共同出荷。当初、国鉄（現JR）の貨物便で配送（約3年間、リヤカーで届けた）、後に宅配。

杉本栄子さんが、甘夏への農薬散布中倒れた。“農薬散布して、食べさせて、チッソと同じことを「消費」者にやっていたんではないか？”という反省が無農薬化（極一部減農薬＝夏場無果実時にマシン油1回散布のみ）への転換のきっかけになった。これに大沢さんが感動して、第2章人物像が示すような反農連誕生に至る。

後述のような大沢夫妻の都市住民運動グループとの反公害社会運動のネットワーク、高齢・病苦・零細などの反農連生産者の気持ちの分かる世代性、都市「消費」者の賛同・共感・交流と杉本栄子さん達のまごころがなければ、反農薬への転換と反農連結成とその先駆的な起業的成功はあり

得なかつたらう。大沢さんの庶民派運動家としてのアドバイスと家族の人柄・感性、家族ぐるみの運動＝生活の日々なくして、また生産者の水俣病との闘い、自身の体とのおりあい、チッソに対する糾弾、チッソ城下町＝水俣市民の白眼視に対する忍耐、古き良き時代のコミュニティーに育った高齢者の相互扶助精神の地域型有機農業運動での開花・連帯、相互啓発・相互営農指導なくして、反農連は、今日まで存続しなかったのではないか。大体、年齢も生活も異なる80世帯生産者の色々な想い・思想（例えば多様な社会運動など水俣病事件と直接的関連のない課題への取り組み）と約3,500名の消費者会員（『かづら』配布先2,500コ）の要望を吸収し、運動として一丸となるのは誠に難しいはずである。ちなみに、当時水俣という名を隠したい人が多い中で反農連は、その名を前面に押し出したのである。

2 産＝「消」提携（プロシューマリズム展開）

PLACE：流通（減農薬栽培）について、1979年6月：反農連結成（「36世帯の病苦の人々。老齢の人によって結成。ノーモア水俣の祈りを込めて」〔かづら〕。1978年12月1日『かづら』創刊号（現在年間2,500部発行）。

「水俣病被害者の想いが…都市生活者（消費者）にどこまで通じるか…甘夏柑が必要とされるのか、見かけの悪いミカンが果たして売れるのか…「水俣病被害者自身にこれ以上農薬を浴びせたくない！」「微生物を殺すチッソの化学肥料は使わない」「水俣病被害者が自立のため立ち上がった」といった想いを伝える為に、とにかく販売ルートを自ら創る以外にない。」（大沢忠夫「水俣での試み」『農業と経済』）

1979年、蜜柑園は回りが慣行栽培農薬散布の「スプリンクラー…に包囲され、反農薬戦線も前途多難」（『かづら』1979年10月6日）

PROMOTION：販売促進（市場＝消費者開拓＝ONE TO ONE RELA-

TIONSHP MARKETING)

1978年4月1日～15日、1ヶ月準備し「水俣反農薬甘夏行商隊」リヤカー自主販売部隊編成（含む三西化学農薬公害裁判支援の会・九大農業問題研究会）、北部九州を2週間トラックで移動、甘夏柑積載のリヤカーで巡回。キャラバン日誌：4月1日、熊本有機農研緒方氏（カネミ油症事件に取り組む）農場訪問、4月2～3日、支援グループ不知火と引き売り、その後福岡市、北九州市（『かづら』第1号、1978年12月1日）でも引き売り。

この春、キャラバン以外も含めて全体で甘夏約62トン販売「出荷の形態も1ケースから11トン（700ケース）又行商とバラエティーに富（む）」出荷箇所150カ所、食べた消費者5,000人になる（『かづら』1978年12月1日）。

「地域別出荷数量（4,237箱出荷）」

「九州439箱（福岡県：柳下村塾8，筑紫野健康を守る会13，小郡命と健康を守る会13，三西化学農薬裁判支援の会10，ふくおか南部生協13，食公害から命を守る会3，八幡鉄町教会10，ふくおか生協200，個人I氏8，KY氏13，KM氏10，A氏8，M氏8，佐賀県：不知火グループ40，個人M氏5他10，九州キャラバン：100）。

山陽・山陰60箱（広島市N氏20，倉敷市W氏8，米子市：米子市政問題研究会30，松江市F氏30）。

関西994箱（京都府：京都水俣病を告発する会370，安全農産物供給センター170，O氏10，I氏25，H氏5，O氏9，T氏3，大阪府：枚方市職190，豊中市共同購入会80，T氏17，H氏10，F氏5，N氏5，M氏5，滋賀県：ビワコ学園30，兵庫県：神戸市職60）。

東海・中部・北陸710箱（愛知県：名古屋水俣病を告発する会330，生活クラブ生協20，S氏23，岐阜県：K氏7，N氏2，長野県[7%]：学校給食を考える会111，K氏85，F氏30，W氏16，I氏7，FK氏4，WN氏3，

KT氏8, 福井県: Y氏30, 石川県: T氏5, 富山県: W氏21, H16)。

関東: 東京都1,298箱(あまなつの会380, あまなつ広場320, 共働社165, 八王子教組12, M氏123, Y氏15, T氏10, I氏60, K氏16, Y氏35, M氏12, N氏15, I氏4, F氏9, T氏30, M氏23, S氏26, O氏5, A氏10, T氏3, M氏13, S氏8, M氏3)。

関東: 東京都外458箱(千葉県: 三里塚ワンパックスの会130, Y氏16, U氏7, S氏10, T氏12, F氏23, K氏3, K氏5, H氏13, 埼玉県: Y氏50, Y氏15, S氏40, M氏3, M氏3, H氏4, 神奈川県: 大磯の自然を守る会12, K氏16, I氏13, N氏6, F氏5, 茨城県: たまごの会10, A氏5, 栃木県: M氏5)。

東北・北海道28箱(宮城県: I氏5, S氏13, 岩手県: N氏10, 北海道: T氏13) その他個人1~2箱発送: 100など。

図表1 地域別出荷比率

	1979年	1980年
北海道・東北	0.86%	1.29% (124箱)
関東	41.18%	46.35% (4,444箱: 内東京2,582)
中部	20.1%	18.24% (1,749箱)
関西	21.54%	18.05% (1,731箱)
中・四国	1.76%	5.33% (511箱)
九州	14.62%	10.74% (1,030箱)

出所: 『かづら』第6号1980年6月16日

1981年には80年より40トン増で180トン(15kg入り12,000箱)。1981年の協同購入団体は、上記以外に、国立市の三多摩食べ物研究会(当時筆者所属)、世田谷学校給食組合、世田谷若葉会、中野青空の会、北区イモの会、

カラコト会，はらっぱ共同保育所，府中ミミズの会，東村山土の会，港区職労，全金オリジン支部，ベチューンに学ぶ会，相模原市のくらしをつくる会，わかば生協，ミドリ生協，所沢生活村，所沢食べものを考える会，狭山若草会，越ヶ谷職労，三里塚労農合宿所，我孫子生活センター，三芳村生産グループ，安全食糧開発の会，座間心と身体健康を守る会，横浜市役所有志，八郷農場，滋賀県野洲町のにっこり共働作業所，堺市の安全な食べ物を求める市民の会，吹田市の四ツ葉牛乳関西共同購入会，熊本市の三里塚闘争に連帯する熊本の会，奄美青年同盟，岩手医大歯口腔グループ，キリスト教仙台伝習所などの，市民・住民運動団体等がある（『かづら』第6号，1980年6月16日，『かづら』号外，1981年12月20日）。

1983年（1,000ケース，190t）全国4,500カ所に配送。

以後も，ただ単なる販促に留まらず，上映会・交流会を含む全国キャラバンへ。

キャラバン個別訪問，中でも3ヶ月に及ぶ「甦れ水俣！全国反農薬キャラバン（1985年9月1日～11月26日）」は，全国各地（交流80カ所，上映60カ所，走行8,500キロ）の消費者グループ・反公害運動グループ・個人を訪ねた。これは，1985年9月1日（水俣出発）より熊本・大分・福岡・山陽・関西・北陸・越後・東北と上り，11月16日（苫小牧）から，仙台・八郷と下り，11月22～25日（東京都），11月26日厚木で終わる（『かづら』第25号，1985年10月20日）。

「そんな必死の売り込みが少しずつ伝わり，消費者の顔，声が判るようになってきた。…“水俣病の教訓を1個のミカンに託して届けたい…”そんな思いが全国の消費者に少しずつ伝わり，販路も広がっていった。」（大沢忠夫「水俣での試み」『農業と経済』p.10）

1999年は台風の悪影響もあり，甘夏61t，雑柑22t，温州ミカン41t，計

124t。

* 農業技術：土づくり・エコテク習得：

「近年、病虫害にも負けず、きれいなミカンも登場し、消費者の中にはビックリする方もいます。」（『かづら』号外，1981年12月20日）。

・堆肥・肥料

「肥料：春肥として鶏糞・牛糞・堆肥を中心に使用。秋肥は動物性配合肥料（油かす・魚粉・骨粉）…除草時のカヤ類はミカンの木の回りに敷き込み，日照りを防いだり，雨水の流出防止，冬場の保温に使（う）」

反農薬「ミカン収穫後に，冬季マシン油を使用，これにより越冬病虫害を油膜で窒息させる。」「除草剤・防腐剤・酸抜剤・完熟促進剤等一切不使用」（『かづら』号外，1981年12月20日）。農業技術として，スアガリ対策も課題。

1990年代から，鹿児島県相良町の業者に年4回ラクトボカシ肥を外注，ミカン山で使用。

・FACE TO FACE コミュニケーション

「私達の理念と消費者のニーズが合わないことも多かった。そこでいかに消費者と直接顔を合わせるか，また水俣の現場に来ていただくか腐心した。」（大沢忠夫「水俣での試み」『農業と経済』p.10）

『かづら』は一貫して生産者の顔と消費者の顔がお互いに見えるように，編集。電話での対応，注文葉書での交信，インターネット使用（残念ながら HP アクセスは今日現在216件のみ，2000年2月オープン）。

（マーケティングミックス：経営）

最盛期：売上げ約1億円弱（含む甘夏200t以外の有機食品，無公害商品），現在約6,000万円（農家80軒参照図表2）。

* PRODUCT・PRICE (契約価格)

「反当たり収量は、収奪（慣行）農業と比べ少ない」「等級なし、ガサクレの甘夏」

パック夏・冬開始、名物水俣からいも・寒漬け大根・水俣茶

異臭問題＝流通問題：対策濡れたミカンは乾いてから、収穫後日を置いて出荷など。

3 プロシューマリズム体制＝インフラ

プロシューマリズムのためのハードのインフラは、次のようなものである。現在、コミュニケーション＝交流・国際（民際）交流・環境教育⁽²⁾・水俣での協同ネットワーク⁽³⁾の拠点としての、7～8人宿泊できる新築合宿・自炊（実質大沢さん一家の手作り料理）施設棟（2000年4月落成・オープン、大沢忠夫さんの書斎・風呂場兼倉庫のプレハブが1999年8月の台風18号で倒壊したため）・18号に耐えた旧プレハブ合宿（7～8人宿泊可）・テレビ談話室・コピー機・書棚棟、大沢家の自給野菜畑・新鶏舎（旧鶏舎は18号で倒壊）・居間寝室、そして3通、つまり通行＝物流拠点の駐車場・倉庫兼作業場と通信・通商＝情報受発信拠点の事務所（3～4人宿泊できる）フル稼働している。

参考のために、図表1当初の旧反農連合宿所(1984年6月20日 イラスト Sakamoto 氏) 全貌を掲載しておきたい。

第2章 生産者像

反農連物語の主役は、水俣病事件被害者の生産者である。甘夏には、生産者のどのような日常、想い、願いが込められているのだろうか？また、

図表2 2000年7月反農連・物産価格表

	品名	価格	数		品名	価格	数
1	パイナップル	左記参照		32	粉セッケン 3kg	750円	
2	夏セット			33	〃 1箱6袋入	4,500円	
3	じゃがいも 10kg	2,100円		34	粉セッケン1.6kg	480円 箱入り	
4	い草座布団3枚入	5,500円 運賃込		35	固形セッケン2個入	150円	
5	海産物セット	2,800円		36	やさしい粉黒糖750g	450円	
6	暮らしのセット	3,000円		37	よもぎ石けん100g	300円	
7	台所セット	1,500円		38	〃 シャンプー	500円	
8	菜種油 0.9L	600円		39	よもぎクリーム40g	400円	
9	〃 1ケース12本入	7,200円		40	よもぎ馬油 40g	600円	
10	菜種油 1.65L	1,000円 なるべく4本以上		41	レンコンうどん200g	220円	
11	〃 1ケース6本入	6,000円		42	〃 12束入	2,500円	
12	〃 1斗缶18L	9,200円		43	れんこん粉末100g	400円	
13	ゴマ油 卓上瓶	300円		44	れんこん飴生姜入 90g	250円	
14	ゴマ油 0.9L	900円		45	鉄火味噌 90g	600円	
15	〃 1ケース12本入	10,800円		46	合わせ味噌 800g	550円	
16	綿実油 0.9L	900円		47	手作りクッキー 80g	300円	
17	つばき油 100cc	900円		48	寒漬大根, 束250g	330円	
18	卵黄油 125cc	3,500円		49	寒漬大根, 刻250g	380円	
19	田舎茶 桜100g	750円 売り切れ		50	シママース 1kg	250円	
20	〃 竹100g	650円		51	やさしお・海の華 750g	250円	
21	〃 梅100g	500円		52	敷きゴザ 6畳	17,000円	
22	〃 白折100g	250円		53	〃 4.5畳	14,500円	
23	〃 粉茶100g	200円 売り切れ		54	寝ゴザ 1畳	3,000円	
24	アオサ佃煮 120g	400円		55	ラクト肥料 2kg	300円	
25	ひじき 100g	200円 売り切れ		56	〃 15kg	1,900円	
26	チリメン 100g	350円		57	油粕 2kg	200円	
27	イリコ小 100g	250円		58	〃 20kg	1,600円	
28	イリコダシ用200g	440円		59	本・証言水俣病	660円 税別	
29	乾燥アオサ 70g	400円		60	本・水俣巡礼	2,800円	
30	甘夏マーマレード	400円		61	乾燥糸コンニャク	450円	
31	キウイジャム	450円					

@い草製品の価格が上がりました。ご了承下さい。

@運賃は1個口(25kgまで)につき、700円～900円。

@やさしい砂糖は取り扱い中止です。

@ご注文の品をなるべく1個口にして送らせていただきます。

図表3 旧反農連合宿所



1 杉本栄子 (61歳)さんの想い

杉本一家の想いを描いた名作「もやい⁽⁴⁾の海：水俣・杉本家の40年」(NHK, 取材のための宿泊は反農連合宿所で行われた。大沢さんの思想に影響を受けた作品のように思われる。BS1で2000年8月10日放映)に拠りながら、伝えたい。

杉本家は、茂道(130世帯500人)の集落の4軒あった「魚(いを)の湧く海」の網元の一つ(網子30人)であった。海の茂道は、前より山手や街の人から差別。昭和30(1955)年頃から体調に異変。1956年保健所に確認。昭和34(1959)年8月トシ(母)さんが痙攣、隔離病棟へ、父進さん栄子さんも発病、激痛が端発的に、同年反農連の生産者(いりこ納入、甘夏[10.3反])にもなる網子の雄(たけし)さん(60歳、婿養子)と結婚。当初、伝染病と思われたりした。現在、いりこは、注文販売・訪問販売・反農連納入。対チッソ闘争とともに、無農薬の甘夏を作り、雄さんは反農連の会計(1990年からは会長)も担当してきた。

1969年6月進さんはチッソを訴える(原告112人)、その年の7月進さん死去(告訴人は茂道では1人)。以後、水俣市の財政と雇用を大半を依拠しているエリート企業チッソに敵対したので、米を売ってもらえなかった。雄さん、子供(次男優さん)に「うちは何日も米ば食べとらん、とばい」と言われ、大口市に出向いて、お米を借りてきたこともあった。今、ムラは、闘いを経て、もやい直しされている。雄さんは、親水護岸公園で、想いを石仏に彫る。

この間に、四男実さんを除いて、子供がみんな水俣から出ていってしまったこともあった。1990年頃、魚が戻ってきた。「海は、わたしたちの財布」新しい船を買った。息子(長男・四男)も、その船上に戻ってきた。

現在、長男肇さん(39歳)(靖子さんと東京から設計の仕事を辞めてユー

ターンして7年)、四男実(33歳)さんと栄子さん、雄さんは暁の、蘇った水俣湾で漁業。二男優(まさる)さん(37歳)は、兵庫県の印刷会社勤務、三男清(35歳)さんは横浜市在住、「水俣の記憶を消したい」。剣道好きの五男大(32歳)さんも横浜市在住。

2000年5月に肇・実・優さんが杉本家に子連れで集まった。孫の女子1歳の誕生祝い。その日に丸い餅を踏む水俣の風習、安らげく丸い人間関係を築くよう、祈って。ちなみに、1歳児がソロバン・筆・米の三つの内のどれをとるかで商・学・農の将来の就業を占う風習あり。

栄子さんはお父さんから言って聞かされた。

「しっかりと人(甘夏の「消費」者)の心を掴んで、自分(生産者としての)が見える人になって、…やってはならないこと(農薬散布)はやってならないんだ」

「虐められても、虐め返しをするな。人と人との和を大切に。病気の辛かよりも人から虐められる辛さ。このような辛さは人にするな。人よりか先に死ぬとやで、スッキリして死のうとばい。」(父杉本進さん)

進さんは、水俣のガンジーではないか、またこれは原爆を落とされても落とすな、“核にキレイな(共産主義防衛の)核も汚い(資本主義的利益の)核もない、核抑止力志向は、さらなる核拡散に繋がり、人類自滅への道”という反核思想にも通じる。社会背景(いじめ)もあって、栄子さんの話は小中高生の励みになっている。

「第二⁽⁶⁾の水俣病を起こさないために、第二の戦いを起こさないためには、しっかりと人と…の心を掴んで、自分が見える人…になって、そしてあの、やってはならないことはやってならないんだ、という心をいつも自分に言い聞かせながら、生活してゆく、それが家族づくりであり、人様のつき合いであり、っていうのを知ったからこそ、…あの…私の水俣

病はここまで苦しめたけれども、生きるために、せつかく生きるためには、いろいろなことを教えてくれたんだな、っていう…ことのほうが、あの…人として本当に有り難いな、と思わんば、そげーな言葉は、私は出なかったろうな、と思いますね。」(杉本栄子, 親水公園にて, 2000年5月, NHK エンタープライズ21「もやいの海: 水俣・杉本家の40年」BS1, 2000年8月10日放映〈取材班反農連合宿所宿泊1999年より2000年5月まで計4回〉)

2 浜元二徳さんの想い

浜元二徳さん: 温州みかん生産者[姉のフミヨさんはかぼちゃの生産者] 当人は以前相思社に卸していたが甘夏事件後反農連に出荷。フミヨさんとともに原発問題に関心があるから自動販売機や日常生活の電力消費に敏感。(1994年から水俣市資料館語り部, 以下は1998年8月29日反農連作業場で, また1999年夏に同資料館で学部ゼミ生とお聞きした内容)。

月浦に生まれる。本人発病前に、ボラの餌をやっていた家の3匹の猫が相次いで死んだ。貝が死に、小魚が湾に浮き始めた。その魚を食べた鳶や鳥が海に落下し、鶏が死に始めた。猫踊り病が出てきた。その内、1953年に人間に症状が出た。1955年7月20日、本人発病、漁に出た船の上で天秤を担っていたら「つっこけた」「震えが出た」。「蚊が止まっても分からない」「痺れが爪から上に上がって来た」当時魚の「おかずが飯」代わりだった。漁に出られなくなったので、1955年にチッソの臨時試験、12月20日身体検査の後12月22日、口頭試問を受けた。合格し、働いたら、一日270円だった。1956年5月1日には、水俣病が公式確認(水俣保健所報告, 湯堂・月浦地区患者調査より)された。同年、チッソ付属病院に入院した。熊本大学病院では、学用患者にされた。お父さんにも劇症痙攣が出ていた。一緒に、

熊本駅に行く汽車の中で、お父さんの症状が他の乗客に分かり、差別の眼で見られ、惨めだった。お父さんは、1956年10月8日、熊大伝染病棟に入院。視野狭窄・運動失調・感覚障害・言語障害も出ていた。私も、診察後、壁伝いに歩いて帰って来た。お父さんは、暴れるのでベッドに縛り付けられたりした。お父さんは、死後解剖された(4人目)。脳細胞にポツポツ穴が空いていた。その標本が同医学部に保管されている(1962年になって胎児性水俣病の幼児が死後解剖されて、初めて認定された。それまでは、脳性小児マヒと診られていた。3人亡くなって初めて認定された。胎児性水俣病の人たちは今、40代半ば)。

当初、水俣病と名付けられる前のその奇病＝ハイカラ病について、漁師が夜釣りに使うカーバイトによるアセチレン中毒説、チッソ工場で作られた爆薬の水俣湾投棄説が出て、1962年には井戸水によるとする伝染病説が出た。患者が恋路島の海の家に隔離されたこともあった。しかし、1956年秋から調査に入った熊本大学医学部は、1959年7月に有機水銀説に到達(チッソ側は、チッソ付属病院細川一博士のチッソ精溜棟廃液混入餌付け「ネコ400号」実験による1959年10月発病結果を意図的独裁的に隠蔽、実験中止命令、箝口令発動。原因を工場外に転嫁、通産大臣池田勇人が、11月2日不知火漁民4000人陳情集会、チッソ「乱入」の責任に関連して、正しかった熊大の有機水銀説を歪めて非難)。

貧乏で収入がなく、一銭でも欲しかった。漁民の中には「かかを売った、娘を売った」者も出た、と言われる。1959年12月31日に、患者(乙)は、騙されて「見舞金契約書」＝不当永久示談をチッソ(甲)と交わした。

「第4条 甲は将来水俣病が甲の工場排水に起因しないことが決定した場合においてはその月をもって見舞金の交付は打ち切るものとする。

第5条 乙は将来、水俣病が甲の工場排水に起因することが決定した場

合においても新たな補償金の要求は一切行わないものとする」(相思社解説「チッソは、工場の排水が原因で水俣病が発生することを知りながら、人を殺した償いとしてではなく、「貧しい人へのお見舞い」として処理。死者30万円，生存者年金：成人10万円・子供1万円。この契約書は、後に、水俣病裁判で公序良俗に反するとして、無効になった)。

1976年頃から車椅子。

環境関連コンベンション（1972年，ストックホルム国連人間環境会議）参加の際，支援の谷さんとポーランドに行った時に，レストランのサラダに虫が付いていたが，取ってもらって食べたら美味しかった。省エネ（電気浪費）と健康・安全面から自動販売機の缶入り飲料は利用しないように。

3 大沢忠夫さんの想い

事務局長大沢忠夫さんの人物像を紹介しておこう。大沢夫妻は，1973年5月，水俣へ移住。それ以前に大沢忠夫さん〈昭和19年生まれ〉は，立命館大学卒業後，流通業（健康食品・台所用品・通販の大王商会）を経て，パートナーのつた子さん（元京都の看護婦さん）とともに友禅染めを3年。染料の鉛を川に流すことに，加害者意識を持つ。水俣移住後，その年，菜穂子さん誕生。大沢忠夫さんは，かねてより浜元二徳さんのお姉さん（反農連生産者）のチッソ島田社長への「女として，生きたかった。恋もしたかった」と詰め寄る映像に，つた子さんとともに心が震え，支援運動を通して，水俣を生き方を問う場，生きる場にしよう，と決意していた。

ちなみに，ある意味ではヴァーチャルな空中戦たる自己否定の論理に貫かれた1960年代末期全共闘運動やベ平連の運動が，現実の生活の前に冷め，「挫折」して来たこの時代⁶⁾，大沢夫妻と同様，地に足の着いたリアリティーのある地上戦たる自己否定＝反差別・反加害者的実生活＝闘いつつ生きる

場に水俣を思い切って選び、移り住んだ。このような若者は、約30人、その子供達が約70人、合わせて現在約100名になる。

移住後、大沢さんは、近代農業とチッソの化肥多投に疑問を感じ、有機農業への転換と反農連結成に奮闘することになる。その経緯について、大沢さんの述懐を紹介しておこう。

「そんな援農（第1章参照）に疑問を持ち始めた時…杉本栄子さんとの出会いがあった。

「生きんが為にも農薬は絶対やめるべきじゃなかかな。自身が水銀で冒されて…毒の恐ろしさ、薬の恐ろしさも身体が知っているし、それが一番恐ろしかったもんじゃけ、単に売らんがためのミカンじゃなくしてですね、食べるミカンじゃち。そんな風にして焦らんと、じっくり生きる為にミカンづくりをしていこうかち思うとります。」

（こ）の言葉に全身が震える感動を覚えた。この栄子さんとの出会いが、援農から地域の再生、自立に向け、反農連…結成の契機になった。」

「小規模ゆえ、農薬拒否も可能であったし、農薬のおそろしさから解放され、水俣病被害がこれ以上悪化しないよう頑張っただけ。希望として、水俣病（事件）被害者が身体のリハビリを兼ねて、楽しみながら納得のいく農業、地域再生に結びつけられないものか。一つの実験であり、賭けでもあった。」（大沢忠夫「水俣での試み」『農業と経済』）

大沢さんは、初心を貫き、30年に及び、反農連事務局長として信望も厚い。「継続とアイディアは力なり」。

4 滝下昌文さんの想い

胎児性水俣病に冒された滝下さんは、1983年11月から約3年間、事務局の仕事を手伝い、キャラバンにも三銃士（大沢・宮村〔福岡県苅田在住〕

さん) の1人として参加。滝下さんの言葉を以下、引用したい。

「僕は、昭和31年7月7日生まれで、今(1984年)27才です。家は、甘夏柑を作りながら、造船所をしています。五人兄弟の四番目です。五年位前に、胎児性水俣病患者を中心に10人位で、「石川さゆりチャリティーショー」を、やったのがきっかけで、大沢さんと付き合いがはじまったけれども、仕事に(反農連に)来るようになったのは、去年(83年)の11月からです。

早生温州みかん、普通温州みかん、甘夏みかん、さつまいも等の出荷や、寒漬大根を包んだり、まきを切ったり、乾いも作り、「かづら」の発送…等をして来て、今みかん山の草刈りをしています…。

ここの仕事を通して、ここに来る人たちや、おばさん達と色々話したりしていると気もまぎれるし、また、友だちも出来たし、本当によかったと思っています。

家の人も、胎児性だから何も出来ないと思っていたけれども、ここの仕事を通して、何でもやれば出来ると、だいぶ理解してくれるようになりました…。」(『かづら』第22号1984年6月20日)

結

反農連のグリーンプロシューマリズムマーケティングは、ノーモア水俣の反公害・地球環境保全の社会運動であった。都市生活者の生き方を無言の内にも問う運動であり、水俣病患者の経済的自立の第1歩になり、続行している起業的なビジネスである。運動としても経営(ビジネス)としても複線的に成功し続けなければならない。

今後の課題は、僭越ながら言わせてもらえば、Silver/Speed/Shareの3Sであろう。Silverは、高齢化・婦女子化・少子化への対応・介護協力で

あり、Speed は、IT 導入と活用（IT 革命の恩恵である「個・安・速」（竹中）の情報を活用したグリーンプロシューマリズム、協力者の徳富さんは OA が得意）、アイテム数の増加（マーチャンダイジング）について、大沢さんの情報受発信の加速強化、例えばキウイ（ジャムあり）などの開発であり、Share はグリーンコープとの協同、合宿所の独立採算性＝宿泊者の費用分担（1泊2食¥1,500では、新築宿舍の維持費にならない）、交流（グループ・個人）の一層の活性化、リピーター重視のリレーションシップニッチマーケティング展開＝苦楽のシェア（水俣事件闘争支援のみではなく、多様なニーズ対応のマーケティング・企業努力も都市生活者は期待している）、水俣市民とのもやいなおし＝Share：A=B=C（Administration=Business=Consumer）のチームワーク、JAS 有機法対応、一層の国際交流（現在、毎年9月に栃木県西那須野のアジア学院と交流）の促進である。

この3Sのためになるのが、グリーン（エコ）マネー⁽⁷⁾である。都市生活者が水俣を訪問し、反農連生産者の負担＝援農公害にならぬよう、高齢化・規模縮小などに配慮しつつ、援農・援漁・介護を行ったり、反農連の運搬配送手伝いや事務局手伝いなどをした場合に、それらの仕事＝ワークの代償として発行・交換し、受け取った都市生活者が合宿費用や石鹼工場での物品購入などの一部に充当する仕組みは、きっと反農連の3Sの活性化に寄与するであろう。

心ない差別者には、一見「ブラブラ」しているように見えても、公害企業で働くエリートよりも、「創造的失業権」（イリッチ）を行使し、反農連で、グリーンマネーをやりとりしながらボランティア活動をする事のほうが、よほど人類愛・地球村民愛に叶っているではないか。

最後に、取材に全面的に協力して頂いた大沢一家、もやい船に乗せてい

ただいた杉本一家，反農連まで来ていただいて語り部をしていただいた浜元さん，自己紹介を引用させていただいた滝下さん，滞在中反農連で淵上毛銭の詩をギターで歌い癒して下さった柏木さん，今回記述しなかったが有機茶を生産加工販売されており宿泊もさせていただいた薄原の吉野一家〈<http://www.fsinet.or.jp/~>〉，みんなの家の砂田さん，石鹼工場の松永さんなど水俣在住の多くの方々に厚くお礼申し上げたい。

—— 「幾人の生命奪ひし海かとぞ，思へばかなし波の音せむ」

(天草御所浦，白倉幸男『かづら』第5号，80年1月10日) ——

注

- (1) グリーンプロシューマリズムとは，環境ホルモンから逃れ，かつ社会内・企業組織内分業を超越せんとするC(消費者)側のB(生産・流通企業)側への参画運動である。その運動の画期は，脱環境ホルモンを訴えた『奪われし未来』の出版。それは，グリーンコンシューマリズムの進化。

プロシューマリズムの語源は，トフラー・Aの未組織的個人のプロシューマー(Prosumer=Producer+Consumer：自給的生产=消費者[『第三の波』第20章]1980年)。

トフラーのプロシューマー概念には，個人と組織という観点からは，DIY・医療自己診断などが例示するように，個人的自給者が中核にある。企業内・社会内分業についての生産過程参加の例示の「注文生産」は，自己「消費」対象の生産過程でのデザインへの個人参加を意味し，その注文生産製品は，直接的個人消費対象になる。

この参加について，マーケットイン(=「アウトサイドイン」)に触れた「アウトサイダーからインサイダー(へ)」(p.362)では，こう述べられている。

「インサイドアウト商品・アウトサイドイン商品(=「潜在的消費者によって企画された商品」)(ブラウン)の内後者の比重が高まり，「商品は特注化し，消費者の生産活動への参加は…必要とされる。」(pp.362-3)「消費者は…仕様をメーカーのコンピューターに直接送りこめるようになる…製造工程を選び…各工程を…「適応管理」〈=相互プロデュース：竹中〉することさえできる。」(ハン教授 p.363)

トフラーはBヒト(生産者組織と個人)Cヒト(消費者組織と個人)・モノ(個別

的な製品と同一種製品) という観点から言えば、プロシューマーの概念に、コンシューマー集団の間接的な消費対象の生産システムへの参画は、入っていない。我々が述べるプロシューマリズム、プロシューマリストは、それを含む。我々のプロシューマリストは、プロシューマーよりラフで自給的生产=消費に徹底していない。

グリーンプロシューマリズムとは、A=B=Cの枠組みの中では、環境保全型生産参画使用主義であり、サシセソの運動(肉体労働復権の進化猿(サ)・生産→流通現場の情報=知(シ)らせ(=情報→IT革命)の活用とB=Cの信(シ)頼・“Small(ス) is Beautiful”・未来世(セ)代への配慮・生態系の相(ソ)互依存(=食物連鎖)の復活運動)である。

それは、グリーンコンシューマリズム、つまり“4R”(Right)生活=“Refuse・Reuse・Reduce・Recycle”特に食生活の3T(高・遠・手)を目指し、4W(WrongのWant・Whiten・Wallow・Waste)生活特に食生活の3Y(安・猶・易)を反省した運動の進化(=一步進んだ生産参画)したものである。ちなみに、グリーンコンシューマリズムを受けて、B側がグリーンマーケティング展開。つまり、C側の4RとA側の環境行政強化にグリーンマーケットインで対応し、4Ace(Alternative・[A]mend[ment]・Appropriate・Assessment[LCA])的戦略展開し、4W迎合(グレイマーケットイン)4Bad戦略(Bargain・Breakdown・Babble・Burying)の反省)。グリーンプロシューマリズム(5S[参画・産出・算用・讃歌・晚餐]運動)とは、この4Rのmore rightの7R(Refuse→7R:Role-Play・Return・Research・Regain・Ring・Region・Receive & Serve)への発展である。

B側のグリーンプロシューマリズムマーケティングは、C側のグリーンプロシューマリズムに対応した、協創の「売れる仕組みづくり」である。

- (2) 食を通したプロシューマリズム的環境教育の根幹は、食べ物の生産現場に関与・参画することである。反農連では、甘夏・いりこの援農・援漁のみならず、希望し条件が許せば、チャボの解体も体験できる。その体験から、「いただきます」の心が身につく。

いのち「いただきます」。食卓の肉片に、眼を閉じて、その主であった、鶏頭を見よ。手羽の毛根に羽毛を見よ。かつて、時を告げた鶏冠、鼓動したハツを聴け。忘却と隠蔽の卑劣を省みよ。そこにイヤな仕事をヒトに押しつけた差別はないか?生産と離れ過ぎてしまい、既に断片となってスーパーに陳列されたモノばかりを消費する者に鶏の運命が分かるか?三島由紀夫の言うように、刀は生存したかった者=具体的人間の返り血、手応え、震えによって、たとえやむを得ない殺傷であったとしても、殺人の罪を肉感させる。それに対して、銃は撃たれる者=抽象的人間から遠すぎる。現在、プロイラーの肉は、国際分業の陰に、銃よりも鶏の命を遠ざけた。焼き鳥の大半がタイで、命の片鱗の見えぬ串にまでされて輸入されている。いかにも、愛情を込めて養った農家、できるだけ苦しめずに絞めた畜産業者、綺麗に捌い

た肉屋、料理屋の仕事と生命倫理を想え。飽食の世は許されまじ。食べ散らかすまいぞ。「ご開山聖人(親鸞)は便所に落ちた米粒でも、拾って食べなされたそうじゃ。」無益な殺生は止めなされ。

ヴァーチャルな思想とリアルな体験の一体化。夕方、わたしたちは、頸を角材の上で断った。肉食という欲望の前の生け贄は、妙にいじらしかった。この手応え、主なまま羽ばたこうとした力、その感触を忘れまいぞ。生は食、食は生。

- (3) 水俣における反農連の協同ネットワークについては、地域協同としての、出荷品目のグリーンプロダクトの一つでもある石鹼工場や合宿についての相互融通の相思社やみんなの家などがある。

このリンクについて：資料反農連 HP (橋川玄武氏作成) を以下紹介しておきたい。

[リンク集]

「水俣病センター相思社：「命と暮らしを破壊された患者・不知火海沿岸住民とともに、水俣病事件の事実と意味を明らかにしよう」とする「水俣病センター相思社—水俣病歴史考証館」の HP です。相思社は研修や宿泊に小学生以上 1 泊自炊1,260 円で利用できます(予約必要)。水俣病歴史考証館には、水俣市立水俣病資料館には見られない、なまなましい水俣病を記録する資料が展示されています。」

「水俣フォーラム：水俣病のパネル展を全国で開いたり、情報の発信、水俣病関連資料の貸し出し、水俣病セミナーや水俣病記念講演会の開催、旅行代理店とタイアップした水俣観光ツアーの開催などの活動を行う「水俣フォーラム」のホームページです。」

「愛林館の HP：熊本県水俣市久木野にある村おこし施設「愛林館」の館長・沢畑さんのホームページです。「エコロジー (風土・循環・自立) に基づくむらおこし」をテーマに活動を行っており、それに即した商品の販売活動などを行っています。」

「みなまたチャチャネット：みなまた茶組合の YOSHINO さんのホームページです。みなまた茶のやお茶作りの 1 年などを紹介しています。「チャチャネット」のコーナーは、管理人の YOSHINO さんが水俣の時事情報を定期的にアップしています。」

「チッソ水俣病関西訴訟：「チッソ水俣病関西訴訟を支える会」のホームページです。チッソ水俣病の関西訴訟に関する情報などが、詳しく掲載されています。」

「River Land：水俣出身の UEDA さんのホームページです。水俣関係のコンテンツが豊富です。テレビで話題になった「玉ねぎ事件」についての詳細も掲載されています。みなまたチャチャネット製作者の一人です。」

「木陰：福岡岡県で学生をしているげんぶの HP です。環境と健康をメインテーマとして、様々なコンテンツがあります。管理人の趣味のコーナーも豊富で、旅行記や写真館、詩集などのコンテンツもあります。げんぶは、「みなまたチャチャネット」製作者の一人で、「水俣・反農薬連」の製作者でもあります。ホームページ作成

のご依頼は、メールで受け付けております。」

「ネット商店街すずらん：ネット商店街すずらんは、環境と健康に良い品々を扱うお店が集うネット商店街です。まだまだ小さな商店街ですが、現在も拡充すべく、鋭意奮闘中です。「みなまた茶組合」のお茶や、「水俣・反農薬連」の商品を購入する事が出来ます。」

「リンクを希望される方：水俣・反農薬連は、リンクフリーです。リンクを張られた場合はメールまたは掲示板への書きこみでお知らせ下さい。」

- (4) 水俣病被害者の高齢化を迎え、またチッソや市（1993年水俣病資料館開館、もやい館落成、ゴミ23分別収集によるコミュニー復活）・県・国の謝罪、市民の反省を受けて、1994年より、憎しみと唾み合いの内に一生を閉じたくない、という被害者の精神的に高い思いから、片口いわし漁の二艘を結ぶもやい、方言の「もやう」に掛けて、纏れたA=B=C、市民間の纏れをほぐし、もう一度事件以前のコミュニティー、人間関係を取り戻そうとする呼びかけが集会などから聞こえるようになって来た。

そのような流れは、とても前向きで反公害・共生の点からも評価できた。しかし、1996年、チッソ側の茂道水俣病同志会も含む5団体との狡猾な和解、未認定患者（認定患者は熊本県1,774名、鹿児島県488名=2262名のみ）のわずかな涙金260万円（チッソの補償、1999年までは県が治療、その後見直し）による第2の見舞金（永久示談）など、チッソ・県・国は、もやいを利用し、患者の慈悲の上にあぐらをかいているように思える。今後、熊本大学の浴野先生や二宮医師の2点識別法（神沢聡「水俣病医学研究は新しい動きより」『ごんずい』第53号）などによる認定が可能になれば、補償基準ももっと明確になり、永久示談は見直されるのではないだろうか？それが、本当のもやい直しであろう。

- (5) このノー第2 = 「ノーモア」について、言葉の厳密な意味で、間接中毒については日本でも新潟県阿賀野川にたれ流された昭和電工の有機水銀による新潟水俣病の発見（1962年）がある（1967年6月民事訴訟）。直接中毒については、水銀工場労働者の発病（ハンター・ラッセル症候群、1937年）やスウェーデンでの発病（1940～50年代）がある。現在も、ブラジルのアマゾン川やアラスカ湾などの魚や大型魚の汚染がある（[A_{sa}・S-1] 1992年5月5日）。だからこそ、ノーモア水俣なのである。
- (6) 学生運動を冷却させたこの時代の背景に、観念的自己否定 = 他者否定の延長線上のリンチや内ゲバ党派闘争があった。若い未熟な党派故の、追いつめられた末の連合赤軍の榛名山リンチ（警察は事前に察知していた、という人もいる）、バランス感覚なき感情的殺傷たる全共闘 vs. 機動隊や〇〇派（+△△） vs. □〇派の内ゲバなどがそれである。抗争現場は、相当纏れていたにせよ、広瀬隆氏のように本当の原爆投下犯たる死の商人シンジケートなどを洞察し、地球村民を核戦争や原発事故などから救済しようとするところの反戦派なら、機動隊との自己目的化した暴力的衝突や内ゲバなど無益と思うはずである。良く言われたように、ヤクザ抗争と同様、勢

力減退・自滅を狙った陰謀集団・現体制派に泳がされているのではないか？若く未熟だったのではないか？いまや、共産主義思想（その脱市場経済の教条がスターリン主義・雷同・ポルポト雷同などの全体主義を必然化する）を自己否定して、その革命軍の機動力・諜報力を活かしつつ、ガンジーのような非暴力直接行動の反戦・反差別・地球保全の NGO に発展解消すべきではないか？新左翼こそ「もやい直し」すべきではないか？

このような抗争（もう付き合いきれない）による絶望から全共闘世代を救ったものの一つが、三里塚の土の匂い、水俣の土と海の匂いなど全国の各地域の住民闘争の現場の土、自然であった。この大地が、死の商人シンジケートの渦から遠のき、その戦争仕掛け人のコンスピラシーを警告しつつ、もう一つの農ある生き方をすることが、空中戦よりも、地球や人類のためになることを教えたのである。かつての反農連の都市消費者（2,500～3,500人）の多くが、このような想いに共感する世代である。

- (7) グリーンマネーは、提携「消費」グループのボランティア活動（収穫・除草・仕訳・連絡などの援農や作付け会議などの運営）ができる人とできない人との間の溝を埋めるソフトなおカネ＝潤滑油になりえる。

グループと農家の共同管理によってグリーンマネー g を発行し、それを潤滑油にして、援農・有機農産物とグリーンマネー g を交換すること、つまり「消費」者個人：援農→g の受け取り→有機農産物（グループのファンドで購入したもの）、グループ：ファンド→有機農産物（農家から購入）→g の回収など g 活用の半市場の工夫が必要に思われる。市場の海に浮かぶ半市場のコミュニティーを g が支える。

引用・参考文献

- [A₁₁・C-1] Allen Cliff (篠原稔和訳)『One To One Web Marketing』日経 BP, 1999年。
- [A_{sa}・S-1] 『朝日新聞』1992年5月5日。
- [C_{oi}・T-1] Colborn Theo, Dumanoski Dianne (長尾力訳)『奪われし未来』翔泳社, 1997年。
- <E_{co}・NE-1> エコマネー・ネットワーク事務局 <EcoMoney Network> wysigwyg://6/http://www.ecomoney.net/ecoHP/top.html/2000年6月5日。
- [G_{od}・S-1] Godin Seth (阪本啓一訳)『パーミッションマーケティング』翔泳社, 1999年。
- [H_{an}・N-1] 反農(薬)連(反農薬水俣袋地区生産者連合)『かづら』第3・4合併号, 1979年6月10日。
- <H_{as}・G-1> 橋川玄武<反農連リンク集> http://www1.ocn.ne.jp/~amanatsu/links.htm

- [H_{os}・K-1] 星野克美『インターネット時代の「マーケティング戦略」』プレジデント社, 1996年。
- [I_{ast}・M-1] 石牟礼道子『苦海浄土』講談社文庫, 1972年。
- [K_{at}・T-1] 加藤敏春『エコマネー』日本経済評論社, 1998年。
- <K_{at}・TE-1> 加藤敏春 <エコマネー> <http://www.ecomoney.net/ecoHP/Katou2/sld003.html>/2000年6月5日。
- [K_{an}・S-1] 神沢聡「水俣病医学研究は新しい動きより」『ごんずい』第53号, 水俣病センター相思社, 1999年7月25日。
- [K_{oh}・N-1] 河野直践『協同組合の時代』日本経済評論社, 1994年。
- [K_{oh}・N-2] 河野直践『産消混合型協同組合』日本経済評論社, 1998年。
- [K_{ok}・C-1] 国民生活センター編 (多辺田政弘・榊瀧俊子著)『日本の有機農業運動』日本経済評論社, 1981年。
- [K_{ok}・C-2] 国民生活センター編 (榊瀧俊子・久保田裕子著)『有機農産物流通の多様化に関する研究：デパート・スーパーにおける取扱いの実態と問題点』国民生活センター, 1989年。
- [K_{ur}・A-1] 栗原彬編『証言 水俣病』岩波新書, 2000年。
- [M_{ar}・M-1] 丸山真人「循環型経済と地域通貨」『地域開発 (特集＝地域通貨による経済循環)』第411号, 1998年12月。
- <M_{at}・TE-1> 松尾匡 <クリーンアップ筑後川> <http://snk.catv.ktarn.or.jp/~yume/> 2000年6月5日(～は「～を・わ」から2番目＝一番右端のBSから2番目の「へ」の字のキーで打ち出すこと)。
- <N_{HK}> NHK エンタープライズ21「もやいの海：水俣・杉本家の40年」BS1, 2000年8月10日放映(取材2000年5月)共同制作：NHK エンタープライズ21, 取材：鄭在雄, 制作統括：岡崎 泰・小林志行, 構成：後藤和子, 語り：林 隆三, 音声：佐竹樹郎, 撮影：古谷野貴樹。
- [O_{sa}・T-1] 大沢忠夫「水俣での試み」『農業と経済』1995年。
- [S_{ai}・J-1] 齋藤實男『グリーンマーケティングII』同文館, 1997年。
- [S_{ai}・J-2] 齋藤實男『グリーンプロシューマリズム』同文館, 1999年。
- [S_{un}・A-1] 砂田明『アメドリの還る日に：乙女塚農園』不知火選書, 1990年。
- [S_{uz}・H-2] 鈴木博『農協の准組合員問題』全国協同出版, 1983年。
- [T_{of}・A-1] Toffler Alvin (徳岡孝夫監訳)『第三の波』中公文庫, 1982年。
- [U_i・J-1] 宇井純編『技術と産業公害』東大出版, 1985年。
- <U_i・JV-1> 宇井純解説 <公害原論> 青林舎, 1974年。
- [W_{at}・M-1] 「私にとっての水俣病」編集委員会編『水俣市民は水俣病にどう向き合ったか』葦書房, 2000年。